
牧場物語 わくわくアニマルマーチ 短編集

南瓜姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

牧場物語 わくわくアニマルマーチ 短編集

【Nコード】

N5124N

【作者名】

南瓜姫

【あらすじ】

牧場物語 わくわくアニマルマーチ 短編小説を載せています。思いつくまま、キャラ同士の恋愛を描きます。

discovery

アタシ、毎日退屈していたの。だってカスタネット大陸って何にもないんですもの。そりゃあ、ミオリさん——鑑定士の未亡人の元で彫金や石の鑑定の修行をすることは楽しいわよ。でも、何かが足りなかったのよ。でもある日、石の鑑定に訪れたアカリを見たとき、ビビビッて来ちゃったの！ 原石を見つけたのよ。

アカリは顔や身体を泥だらけにして石の鑑定にやって来た。あいにくミオリさんが墓地に出かけていて留守だった。

「悪いけど、鑑定士が出かけてるの。またにしてちょうだい」

アタシは指先にマニキュアを塗りながら、ふとアカリを見上げたの。吸い込まれそうなきれいな瞳だったわ。目は切れ長で鼻は大きくらず小さからず。きゅつと結んだ口元に意志の強さを感じたわね。芋かと思ったけど、よく見るとパーツは整っている。

「あなた、何？ その格好。ダサいわね」

そう声をかけると、アカリは頭をかいて恥ずかしそうだった。何をしていたかわからないらしい。んもうっ！ まどろっこしいわね。アタシ、思わず約束しちゃったわよ。明日の三時に仕立屋へいらっしやいて。

*

翌日、約束の時間より早く仕立屋に着いたアタシは、主のセラフ

さんと話したの。「今日はどうしたんだい？」って聞くから事情を話したわよ。そうしたらセラフさんったらアカリの事を話し始めたわけ。一人でこの大陸に来て、牧場を経営しているって。町の人たちとも友好的にやっているらしいわ。

そこへドアを開けてアカリがやって来た。

「こんにちは」

「いらっしやい、ジュリがお待ちかねよ」

ん、もうっ！ セラフさんたら余計なことを言うんだから。

アカリはシャワーを浴びてきたようで、今日は泥だらけじゃなかった。肌は白くてきめが細かい。セラフさんの孫のコトミも色白だけど、それに匹敵するわね。

「じゃあ、早速見立ててあげる」

アタシはセラフさんに断わって、見繕っておいた服をかわるがわるアカリの身体に当てた。うん、この子はブルー系が似合うわね。

「アカリ、あなた、おニューの服を着ていく場所の予定はあるの？」

すると、アカリは頭をかきながら、海祭りだといった。町長の息子のギルに誘われているらしい。海祭りって事は、夜の花火大会にも出かけるのよね。

アタシはアカリに似合う目の覚めるようなブルーのサンドレスに、カラフルなビーズをあしらったビーチサンダル、つば広の白い帽子をセットした。

＊

花火大会はコトミと行ったわ。あの子、珍しく誘ってきたのよ。アカリの様子を見てやろうと思っていたから、ちょうど良かったわね。二人で浜辺を歩いていると、前方にアカリとギルが見えたの。

アカリは、アタシがコーディネートした格好だったわ。うん、さすがアタシね。すぐボーイッシュな彼女に似合っていたわ。ギルだってまんざらでもない様子で、鼻の下を伸ばしているし。

でも、なんか面白くなかった。なぜだかわからないけど、イライラするのよ。

すると、アタシたちに気付いたアカリが会釈したわ。隣のコトミが丁寧にお辞儀していた。でも、アタシ面白くなかったから無視したの。そうしたら、アカリ、哀しそうな顔をしたわ。そのとき胸がキュンって締め付けられた。

＊

翌日、アカリが顔を泥だらけにしてやってきたわ。今日はミオリさんがいたから、アタシの出番はなくて、店の隅のソファに座って宝石を磨いていた。

鑑定を終わらせたミオリさんがアタシの前に来たの。墓地に行ってくるから留守番をお願いねって。もちろん、アタシは了解したわ。ミオリさん、帽子をかぶって店を出て行った。

「はあ」

思わずため息をついちゃった。

「どうかした？」

ええっ！？　アカリ、まだ居たの？　アカリがアタシの顔を覗き込んでいるのよ。

「あ、あんたこそどうしたのよ」

そう言うのと、アカリはリュックからタッパを取り出した。この間のお札にと手渡される。タッパの蓋を開けると中に入っていたのはコロッケだった。ちょうど小腹の減っていたアタシは「ありがとう」と断わって、コロッケを一つつまみ口に入れた。ん、カボチャのコロッケね。すると、アカリは「カボチャのコロッケってジュリさんが好きなんですよね」と言った。まあ、アタシの好みをリサーチしてくれたの！？　「じゃあ」と言って、アカリは帰ろうとした。アタシは思わず引き止めた。

「ねえ、お茶飲んでいかない？　アタシ一人じゃ留守番退屈なのよ」

そう誘うと、ヒカリは肩をすくめながらも、ええと答えた。さあ、ギルから彼女を奪うわよ。だって、アタシ、アカリに惚れちゃったんだもの。

discovery(後書き)

ジュリ×アカリのお話です。

はっばうさい!?

ここはタムタムの森の最奥の沼地に建つ一軒の家である。外見はおどろおどろしい家だが、そこにはとてもキュートな魔女さまが住んでいた。そして、僕――タケルは魔女さまに会いに来ていた。魔女さまに命じられ、僕は火鍋をかき回している。魔女さまはソファに座り、手の指にマニキュアを塗りながらつぶやいた。

「イチゴのアイスが食べたいわ」
「作ってきますよ」

僕は急いで家に帰り、イチゴのアイスを作って、今魔女さまの家の前にいる。喜んでくれるかな、イチゴのアイスって結構自信があるんだ。

「魔女さま、入ります!」

「どうぞー」とあの可愛らしい声が聞こえてくる。僕はいそいそと中に入り、魔女さまにイチゴのアイスを差し出した。

「あら、いらないわ」
「え?」

「今はカボチャのパイって気分なの。悪いわね」
「ははは、そうですか……冷凍庫に入れておきますから後で食べてくださいね」

また始まったよ、魔女さまの気まぐれ。でも、僕は彼女にメロメロなんだ。どうしても、好きって言わせたいんだ。

「じゃあ、パイを作ってきますね」

少々脱力した僕は帰ろうとした。すると魔女さまに呼び止められた。

「待って、もういいわ」

「え？」

「タケルが女の子ゼーんぶに優しいのは知ってるんだから」

「そんなことないです」

「はっばうさいってやつでしょ？ アタシは騙されないんだから！」

そう言うと、魔女さまは背を向けてうつむいた。

「見たのよ、昨日ハモニカタウンで、あんたが酒場で女の子に抱きついてるところ」

夕べ、僕は酔っ払ったシーラにからまれたことを思い出した。

「その女ったら巨乳で、あんた鼻の下を伸ばしていたじゃない。あ、アタシだって胸は大きいんだから。あんな小娘に負けるわけないじゃない……」

あれは、シーラが抱きついてきたのだ。鼻の下が伸びていたのは否定しないが。支離滅裂なことを口走っている魔女さまの声がだんだん震える。ひょっとしてやきもちを妬いてくれているのだろうか？

「魔女さま」

「な、何よ」

「はっばうさいじゃなくて八方美人でしょ？」

「そ、そうとも言うわね」

「僕は魔女さま一筋だってわかりませんか？」

魔女さまの顔がみるみる赤くなる。僕の言った事を理解してくれたいだ。

「もう、やだ！ 何よ、責任取りなさいよ」

「どう取ったらいいんです？」

魔女さまは上目遣いでじっと僕を見つめた。

「アタシのものになりなさい！」

「それって、僕のものにもなるって意味ですよね？」

そう確認すると、魔女さまは顔が青くなったり赤くなったり、まるで信号のようだ。僕は魔女さまの肩に手を置いた。目を見開いた魔女さまをじっと見つめる。潤んだ瞳の中に自分が映った。そっと唇を押し当てる。魔女さまは、さらに大きく眼を見開いていたが、だんだんまぶたを下ろしていった。そっと離すと、魔女さまはぼうつとしていたが、また目を見開いて僕をにらみつけた。

「な、何するのよ！」

「あれ？ 経験豊富な魔女さまだからキスもなれているかと思ったのに」

そう意地悪を言うと、魔女さまは目に涙をいっぱいためていた。

「い、いくら長く生きているからって、初めてなんだから仕方ないでしょ！」

ああ、僕の好きな魔女さまはこんなに可愛い。いつも僕を奴隷み

たいに扱うけれど、中味はピュアな女性だったんだ。魔女さまの反応に気を良くした僕は、魔女さまの背中に手を回し、耳元でささやいた。

「これから僕の家で夕食を食べませんか？」

「い、行ってあげてもいいけど」

素直じゃない魔女さまに止めを刺す。

「夕食の後、ゆっくり話をしましょうね。今夜は帰しませんよ」

魔女さまは目を見開いて僕を見ていたが、にやっと笑みを浮かべた。

「いいわよ。ずっとぎゅっとしててね」

顔が爆発しそうだった。魔女さまを赤くしようと思ったのに、かえって僕がやられてしまった。

はっぽうさい!.. (後書き)

無償の愛

今にも枯れそうな巨木の下で、女神さまは両手を胸の前で組み、祈っていた。その姿は教会のステンドグラスに描かれていたものと同じだった。地まで届く長い瑠璃色の髪が彼女を包み込んでいる。

「女神さま、救世主を連れてきたの！」

そう叫ぶフィンの言葉に女神さまは祈るのをやめた。そして僕を見て微笑んだ。

「お名前は？」

「タケルです」

「何も知らないあなたを巻き込むことになって申し訳なく思います。しかし、あなたの力が必要なのです」

「僕でよければお力になります」

「ありがとうございます」

そう答えると、女神さまはふらついた。僕は慌てて女神さまに駆け寄り身体を支えた。女神さまは力なく微笑む。長いまつ毛、海のような深い青い瞳。一瞬で心を奪われた。

＊

それから、フィンと共に五つの鐘を探す毎日に明け暮れた。その傍ら、女神さまの様子を毎日欠かさず見に行く。とても心配なのだ。自分の身体を省みず、島の平和だけを願っている。そして、僕を気にかけてくれる。「無理をしてはいけませんよ」と。そんな献身的な女神さまをいつしか愛するようになった。しかし、自分はただの

人間、女神さまとつりあうはずもない。

「このごろ、タケルがここへ来てくれると、とても心がうきたつのが感じますわ」

ある日、女神さまが頬を薔薇色に染めて、僕に告げた。僕はその言葉に有頂天になる。

「女神さま、少し散歩をしませんか？」

女神さまは少し迷っていたが、散歩しても良いといってくれた。神殿跡を二人で歩きながら、僕はたずねた。

「女神さまは独身なのですか？」

「独身、ですか？　そうですわ。私は女神ですもの、全ての人に愛を注がなければなりません」

女神さまはそう答えた後、僕をじっと見た。そして泉に視線を落とす。

「でも、最近一人の人に心を奪われるのです。いいませんわね、女神なのに」

「誰なんでしょう、その幸せな奴って」

僕がそう質問を投げかけると、女神さまは困った表情をした。

「私は自分が幸せになるようなことは出来ません。皆の幸せを祈ることが勤めなのです」

両手を胸の前で組み、祈るように答える女神さまに、僕の胸は悲

鳴を上げる。女神さまにこの想いを打ち明けることは、女神さまを苦しめることになるのだろうか。

「でも、女神さま自身が幸せでなければ、人間の幸せを祈れないのではありませんか？」

僕の言葉に女神さまは目を見開いた。

「タケルの幸せは？」

「僕は……」

答えられなかった。僕らの間に沈黙が流れる。すると、女神さまが口を開いた。

「タケルには幸せになってもらいのです。どうしたらよいのでしょうか？」

僕は女神さまの言葉に決心をした。今、この想いを告げなければならぬと思った。

「僕の幸せは……あなたと共に生きることです。叶いませんか？」

「タケル」

女神さまは手を胸の前で組んだまま涙を流した。僕はそっと女神さまの背中に手を回す。

「いつもあなたを想っていました。でも、あなたと他の方との幸せを祈らなくてはいけないと思っておりました。日増しにあなたへの想いが募り、女神であることを呪う夜もありました」

「僕もです。あなたは全ての人のものだから」

女神さまは首を横に振る。

「いいえ、私の幸せはあなたを愛することです。でも、あなたも私を愛していてくれたのかと思うと」

女神さまはそれ以上言葉に出来ないようだった。

「ずっと待たせてしまうかもしれませんが、鐘を全て鳴らしたら僕と結婚して下さいね」

女神さまは僕を見つめて、ただうなずいてくれる。僕は女神さまの髪をそつとすくった。そしてその瑠璃色のつややかな髪にそつと口づけを落とした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5124n/>

牧場物語 わくわくアニマルマーチ 短編集

2010年10月10日00時11分発行